

山田憲太郎著

『東亜香料史研究』

植村泰夫

本書は著者が序で述べるように、氏の40年来の香料史研究の集大成である。山田氏は昭和17年に「東亜香料史」を出されて以来、「日本香料史」(昭和23年)、「東亜香薬史」(昭和31年)、「愛情の匂いと生命の味」(昭和35年)、「香料の歴史——スペースを中心に——」(昭和39年)と研究成果を一連の著書にまとめられてきた。その際、氏の一貫した問題関心は東西交渉史上重要な香料の基礎研究を通じて東西交流の姿を解明することにあつたが、本書では特に東アジア世界の香料史の体系化がめざされている。すなわち本書の構成を見ると、本書の中心をなす第一部「香料薬品を中心とする南海貿易の最盛期に撰述された『諸蕃志』(全志物)の香料の研究」では、その中国伝播の来歴の解明と、中国の香料使用の歴史がインド、西南アジア、ヨーロッパとどのように異なっているかを跡づけることが課題とされる。第二部「日本沈香志」は第一部の補論として、東アジア世界における香料使用の中心をなした「香」の使用の実態が日本の場合に即して歴史的に概観される。第三部「肉桂史の研究」は古代泰西、中世ベルシャ、アラビアの肉桂と東方アジアの肉桂の関係の分析から、古代の東西交渉上の問題に一つの解答を試みられたものである。従来、中国と

南アジア諸地域との関係史の上で香料貿易が大きな部分を占め、特に南海貿易の最盛期たる宋元時代においてはその国家財政に占める割合が極めて高かったことは多くのところで指摘されてきたことである。また香料は古代以来の東西交通における海上ルート的主要交易品の一つであり、よく知られているように絶対主義ヨーロッパ諸国のアジア進出の一つの目的はこの香料確保にあつた。更に評者の問題関心からすれば、かつてスフリーケは東南アジア史上の諸国家を商業交易に依存する沿岸商業国家と農業に依存する内陸農業国家に類型化したのが、前者の場合には直接的に国家財政の問題として香料貿易の問題がかかわってくる。後者の場合でも、例えばジャワにおいて中国との貿易関係が深まることもに胡椒栽培が拡大したといわれるように在来農業の変化として、あるいは国家権力の農民支配の側面として香料の問題は等閑視できないところである。

以上のように見るならば、香料の問題の解明はアジア史上の多くの問題とかわりを持つ重要な課題であると言えようが、史料上の困難もあって、従来、体系的に香料を取り扱った研究は僅かである。「諸蕃志」の研究ではヒルト、ロックヒル両氏による英訳注本「Chau Ju-kua, His Work on the Chinese and Arab Trade in the twelfth and thirteenth Centuries. 1911, St. Petersburg. 及び、これをもとにした馮承鈞撰「諸蕃志校註」(長沙1940)がある。また宋代の香料貿易を扱った最近のものとしては、林天蔚「宋代香薬貿易史稿」(香港1960)があり、宋朝の国家財政に占める香料の意義については河原由郎氏の論考もある。しかしいずれも山田氏の一連の研究と比較するならば、香料の基

礎的研究としては詳細さにおいて右に出るものではない。この意味で本書は、東アジアの香料史を体系化した唯一の基礎的研究と言えよう。

さて小稿では本書の第一部を中心にその内容を紹介し、評者の感じた点を述べてみたい。ところで第一部は「諸蕃志」の解説であるが同時に香料の溯源史的研究であり、その内容は多岐にわたる。紙数の制約もありその全部をきれなく紹介することは不可能であるので、ここでは著者の課題設定に沿って各香料の来歴及び中国での使用の問題を中心におきたい。

まず緒言において「およそ物産の歴史を考究するとき、第一の条件は、その物資がなんであったのかを正確にすることが、まず何よりも必要である」が、従来の研究はともすれば動植物学上の学名比定に終っていた、そうではなくて「宋代の社会生活が必要とし消費した物資として、商品史的に考察されなければならない。」と本書の方法が示されていることに注意しておきたい。

第一章「龍腦」では、中国ではこの香料を最初はサンスクリットのカルプーラの転音である羯布羅と呼んだが、その後7世紀半ばごろに龍腦香という独自の名称が与えられたといわれる。この龍腦の中国への伝来については唐宋の「酉陽雜俎」18の「龍腦香樹出婆利国、呼為固布婆律、亦出波斯国……」の解釈をめぐる論争がある。ヒルト、ロックヒル両氏は「亦出波斯国」をペルシャ船によってカンフルが輸入されていたと解釈した。これに対してラウファー氏は、唐代の波斯にはペルシャ本土とマレー諸島のペルシャの二つがあり、文中の波斯は後者を指すと考えた。またベリオ氏はペルシャ本土に生育する一種のカンフルが中国に輸入さ

れていたとしてヒルト、ロックヒル説を支持した。本書はカンフルの輸入がペルシャ船の独占に近かったとは解釈できない、波斯「マレー説はその前提として当時そこにペルシャ人コロニーの類の存在が必要となるがこれは疑問である、ペルシャ本土に一種のカンフルが存在したとするのは考証が先行しすぎであると諸説を批判した上で、要は当時の中国人にどう解釈されていたかである、当時イラン系民族の東西交渉史上の活躍によって東西の物資の多くが波斯産と考えられており、この場合カンフル採取に関する波斯人の説明を実際に波斯人がそのように採取していると解釈したから「亦出波斯国」と書かれたと述べる。次に「婆利国」については「婆律」の誤記であってバリ島にはあたらない、「固布婆律」は「婆律の箇布(カンフル)」の意味である、すると婆律の位置のみが問題になるがこれはスマトラ西北部沿岸一帯であると解釈される。以下、本章では渤泥、マレイ半島、三仏齊のカンフル、採集と品種、値段と用途が述べられる。

第二章は「乳香と没薬」であるが乳香を中心に述べられている。「諸蕃志」では乳香は別名を薰陸香というと記している。本書によればこの薰陸香は4世紀頃からまず大秦国海辺に産する西域伝来のものとして認められ、5、6世紀には南海経由のものとの南の波斯に産するものが知られ、7世紀に入るとインド産を中心とするもののように受け取られてきたとされ、その実体を明らかにするためインドのググル、クンズルが分析される。そしてこれらがアラビア乳香、没薬と混合して使用されていたこと、薰陸はクンズルの音写でありこの混合物の通称であったこと、波斯に産するところのはアラビア乳香が波斯経由でインドに伝播しここで加工

されイラン系の人々の手で中国に運ばれたためであることが述べられ、これらの点から薫陸香の実体は初期にはインドの加工品である、7世紀になるとこれよりすぐれたインド乳香が主体となったが、8世紀に純品のアラビア乳香が伝来すると薫陸香はこれを中心とするものに変ってしまったと變遷が説明される。宋代にはアラビア乳香の輸入は急増し、南海貿易貨物中とくに重視され政府専売品の一つに数えられる。山田氏によれば宋代の香料の使用は量的にも質的にも沈香、乳香、檀香、胡椒の四つをもって代表されるとされ、当時中国で乳香に対する大消費が存在したと述べられる。

第三章は安息香と金顔香についてである。本来の安息香とはタイ、ベトナム、スマトラ、ジャワ、マレー半島に産するものであるが、10世紀以前の中国でいう安息香はインドの芳香樹脂であり、ガンダーラ地方經由で伝来した薫陸香中のある特定品であったと述べられる。安息という名の由来については従来説かれていたように(1)安息国という国名に由来する、(2)息を安んじるの意味に由来するといったものではなく、当時の中国でこの香料をガンダーラから来るバルチア人の香料と解釈したことによるとされる。ところが12世紀以降になると南海のベンゾインが安息香、金顔香として輸入されている。本書はこの名称の転用について触れ、イスラム商人達はベンゾインを直接に中国へは運ばず、東西に転送加工し、これがインド、ペルシャ、アラビア各地の主要港の輸出入品となっていた事情と関係があると述べる。

第四章篤耨香では「篤耨」音が中国本来の語であること、第五章蘇合香油では「蘇合」が中国独自の言葉であると述べられる。

第六章は沈香に関して詳細に述べられる。香料を焚香料、化粧品、調味料の三部門に明確に分類したヨーロッパの使用法に対し、東アジアでは焚香料が主体であり沈香はその中心である。宋代の香料輸入品中、沈香木は乳香とともに特に注目されており、中国の版図内からも大量に産出、他の香料と混合して焚く合香や沈香木のみを焚くことが大流行したといわれる。産地については唐以前はインドシナ、カンボジア、マレー半島であったが、唐中期から海北、嶺南、唐末以降は海南島のもの知られるようになり、12、13世紀には海南島産が群を抜いていたとされる。さて沈香木中の最優秀品を迦闌香とか棋楠香といい、その値段は金に等しかったといわれるが、この名称の由来が考察される。従来、クロフォード氏が説いたように、迦闌の語源はマレー、ジャワ語の *kalanbak*, *kalanbah*、棋楠はチャンバ語の *kinan* と考えられてきた。これに対し、杉本直治郎氏はサンスクリット *kañi* のすなわち黒に中国語の木をつけた合成語伽羅木が宋末元初に南方へ伝播し占城で *kambak* と呼ばれ、この語尾を省略した *kanan* が転じて *kinan* になり、中国へ再輸入され棋楠の字をあてられたと説いた。本書は杉本説に依りつつも、伽羅木という合成語発生の事情について更に考察を進め、*kalanbak* が中国国内で発生したのではなく、宋末元初に占城のある特定の地域に出る黒色の潤沢な香木を現地でこのように通称するようになったものであると解釈する。

第七章降真香では、それが唐代に知られるようになったこと、宋代には一般庶民の香として流行したこと、「香録」に記される産地のうち海南とあるのは南海の誤りであることなどが説かれる。

第八章は胡椒である。本書では先ず「東方見聞録」の記述が引かれる。これによれば泉州の胡椒輸入量はヨーロッパ全体の消費のため輸入される量の百倍に達するとされるが、山田氏はこの記述から当時の中国の胡椒消費量がヨーロッパ全体のそれを上まわっていたこと、それは大都市の繁栄による消費生活の変化、とくに食生活の変化に原因があると想定される。以下、本章ではこの点为中国でのスパイス使用の実態、胡椒の中国伝来、宋・明の胡椒輸入の面から考察される。中国では古来、食生活に種々の薬味を使用してきたが、宋以後になるとその使用は一段と進歩し料物と呼ばれる薬味をあらかじめ調合した香辛料が登場し、この中に胡椒をはじめとする南海産スパイスが多く使用されるようになる。中国ではヨーロッパのようにスパイスを調味料として独立して使用するのではなく、在来の薬味料の中に包含しているところに特色があると述べられる。胡椒の中国伝来は、まずインド産ペッパーが西域のイラン系民族を通じて知られ、7、8世紀からジャワ産のキューベブと胡椒が伝わり10、12世紀からその輸入がしだいに増加する。ところで「諸蕃志」以前の宋代の南方地誌類の中では僅かに「嶺外代答」に胡椒が閩婆の産としてあげられているのみであるが、それから50年後の「諸蕃志」になると突然にジャワ胡椒の明確で詳細な記述が出現する。山田氏はこの間の変化を、胡椒に対する需要が急増したこととあらわれであろうと解釈される。「諸蕃志」は上巻の閩婆の条で商人が禁制の銅銭をひそかに持ち出してジャワの胡椒を買おうとするのに対し宋朝がジャワへの渡海を禁じたことをあげているが、これは銅銭が胡椒輸入の急増によって突然に大量流出したからであろうと説明される。次に「島

夷志略」「瀛涯勝覽」の検討から、13世紀前半にはジャワ、14、15世紀にはマラバル海岸とスマトラ西北部で胡椒生産が盛んになったこと、これらは私貿易によって大量に中国へ輸入されたことが明らかにされ、かくして「諸蕃志」の時から中国の胡椒時代が始まったと結ばれる。

第九章は龍涎香である。この名称は9、10世紀初に成立した中国独自のもので、実体は抹香鯨の体内に生じるアンバルである。これを東西に広めたアラビア人は焚香、化粧料その他多くの用途に利用したが、中国へは11、12世紀に伝来し用途は焚香料の保香材であったとされる。産地は大食とその近海とされるが、「島夷志略」になるとアンバルの産地として龍涎嶼という島名をあげている。この位置については早くからわが国でも藤田豊八氏、桑田六郎氏などが言及されている。本書では従来の研究のようにその範圍をせまく限定する必要はないとして、これはアンバルのよく取れると伝えられるインド洋中のスマトラ西北沖の島礁のことであり一定の島に限定されるものではないとの解釈が示される。

第十章は雜藥という形で梔子花、薔薇水、檀香、丁香、肉豆蔻、白豆蔻、葶澄茄、臘腦臍の8品目が解説される。山田氏によれば、これらについては原産地における原植物の生育状況を充分に見てはいないから各々の溯源史研究を草するまでに及んでいない、それゆえ「覚書」の形をとるとされる。とは言うものの、実際にはかなり詳細な解説がなされている。

第一部の結語ではまず「諸蕃志」のあげる香料各品が焚香料、化粧料、香辛料に三分され、中国の香の主体が沈香であったことが明確にされる。次に「諸蕃志」の記事の根拠が「南蕃香録」か

ら15品、これと「嶺外代答」をあわせたもの1品、「嶺外代答」から1品、伝聞によるもの6品であると整理され、この点から「諸蕃志」の記述は伝統的な本草博学の流れと異なり極めて実証的なものであることが明らかにされている。

第二部では日本への沈香の伝来は6世紀末ごろであり、最初は仏教儀礼に伴うものであったが、平安朝になると貴族の間で「たきものあわせ」が流行する。やがて新興武士の間から沈香木のみを焚くことが流行し、香道へと発展してゆく。しかし香道は次第に形式化してしまうことになる、豊富な史料に基づいて著述される。

第三部第一章「古代オリエント、ギリシャ、ローマのシンナモンとカッシア」では、聖書に出てくる古代泰西のシンナモン、カッシアが南アジアに生育する本来の肉桂とは別種のものであったことが実証される。第二章ではヘルンヤ語のダル・チーニーは通説のように中国の肉桂を指すものではなく、チーニーは漠然と東方を指したものでありこの場合はインド肉桂が主体であったことが述べられている。

以上、かなり大ざっぱに本書の内容を見てきた。本書を一読して感じる第一の点は、本書が「諸蕃志」志物の研究としては従来にない詳細なものであることである。かつて和田久徳氏は「諸蕃志」の現行本には脱落や誤りがあり、「嶺外代答」や「南蕃香録」と対照検討することによって相互の史料価値を一段と明確にすることが可能であるとされたが、本書ではこれらに基づいて「諸蕃志」のテキストクリティックが全面的に行なわれている。更に、植物学上の知識が縦横に駆使されていることは本書の強みであり、

これらによって本書はヒルト、ロックヒル両氏のものをはるかに越える水準にあると思う。従って宋代の商業史、あるいは中国と東南アジアの関係史などの研究にとって、本書は貴重な基礎研究といえよう。

第二に、本書では東アジアにおける香料の中心が焚香であること、その中でも沈香が重要であって「沈すなわち香」であると、東アジアの香料使用の特徴が明快に指摘されている。沈香の使用の実態の分析の細かさなどは他に類をみないものである。この点では著者が序において設定された中国を中心とする「香」の世界の跡づけという課題が果されているといえよう。

以上のように本書は他に類をみない貴重な研究であり、われわれは本書を一つの出発点として更に一層の研究の発展を望むことが可能であると考えるのであるが、その意味からも本書に対する二、三の疑問点を述べさせていきたいと思う。

その第一は第一部緒言で示されている本書の方法「商品史的」考察の内容にかかわる問題である。たしかに本書では各香料が宋代を中心に中国に輸入され使用された商品として取り上げられ、ことに沈香、胡椒についてはその使用実態が克明に描かれてはいない。しかしその際、これらの香料の宋代における輸入の増大が、都市の発展による消費の増大というシナームで一般的にしか説明されていないことは、今一つ説得力に欠けるところである。たしかに都市においてこれら香料各品がどのように消費されていたのかを官府の報告書の類から追跡することは困難であろうが、宋代には例えば「東京夢華録」の如き都市生活を描いた記録も存在する。これらを丹念に検討してゆけば、宋代の香料使用の方法のみ

ならず都市でどのように使用されたか、その程度がいかなるものであったかといった点がもう少し具体的に明らかにになったのではないだろうか。

次に本書の内容の一部にかかわる点であるが、第一章「龍腦」における「西陽雜俎」の「出波斯国」の解釈をめぐり本書ではラウファー氏の波斯・マレー群島説は事実として疑問であると退けられる。しかし最近の研究によれば、遅くとも元代にはマレー半島・ベナン近隣にベルシャヤ人のコロニーが存在したことも明らかにされている。このことからすれば唐代にベルシャヤ人のコロニーが存在しなかったと簡単に否定できるだろうか。いずれにしろ、この問題は今後の研究の発展に待つ以外ない。

第三にいささか欲ばった注文になろうが、本書では中国における香料使用とその来歴については詳細でありそれが本書の最大のメリットなのではあるが、来歴解明の方法は主として音韻の比較を中心とする考証によっており、香料貿易の構造自体についてはあまり触れられていない。氏の旧著「香料の歴史——スパイスを中心にして——」を見ると交易ルート、交易船の問題などが比較的詳細に述べられており、本書でもこの面から各香料の来歴の分析が進められたならば本書の体系は一層豊かなものになったであろうと思われるのである。

以上、自らの不勉強を省みず、思いつくままを述べた。本書の内容は多岐にわたっており、評者が著者の意図を充分理解できていないままに意見を述べた部分も多いと思われるがこれらの点についてはお許しねがいたいと思う。いずれにしろ、最後に本書が香料史の基礎研究として貴重なものであることを再度確認してお

きたい。

(A4版 四九七頁 一九七六年二月 中央公論美術出版 一万二千円)